児童図書館
文学の部屋

グリーン・ノウのお客さま

L・M・ボストン作・亀井俊介訳

グリーン・ノウ物語 4

評　論　社

評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第730697号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋 グリーン・ノウのお客さま

昭和43年10月10日 初版印刷
昭和43年10月20日 初版発行

¥590

訳者 亀井俊介

発行者 竹下晴信

印刷所 三倉印刷
製本所 株式会社小林製本

発行所 株式会社 評論社
東京都千代田区神田神保町2ノ16
電話代表 (265)1961
振替東京 7294

(著者との了解により検印省略)

落丁・乱丁本は本社にてお取り替えいたします。 (A−1)

グリーン・ノウのお客さま

L・M・ボストン作　亀井俊介訳

グリーン・ノウ物語 4

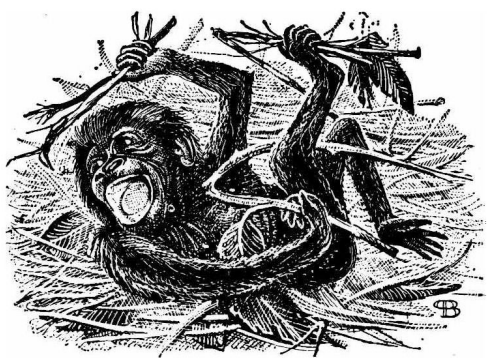
A STRANGER AT GREEN KNOWE

by

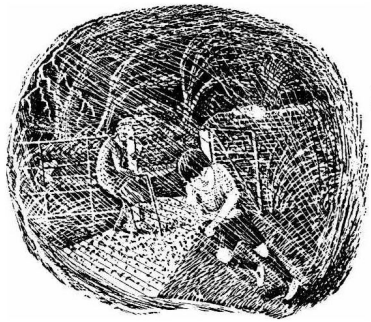
L. M. Boston

Illustrated by Peter Boston
Original English language edition published
by Faber and Faber Ltd., London
Copyright © 1961
by Faber and Faber Ltd., London
Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Co. Inc. Tokyo.

もくじ



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com



第一章

1　ゴリラの一家……9

2　かくれんぼう……29

3　おりの中……43

第二章

1　ハンノー……50

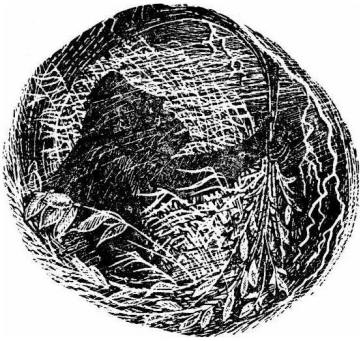
2　アイダの手紙……74

第三章

1　オールドノウ夫人……79

2　ピンの旅……83

3　いなくなったハンノー……87



4 むく鳥の群れ……103
5 森の中……106
6 べんとうの行方……126
7 秘密……144
8 盗みと嘘……147
9 もうないよ、ハンノー……160
10 子ゴリラになったピン……172
11 あらし……184
12 グリーン・ノウの捜索……207
13 ハンノーの最後……224
あとがき……237

さし絵　ピーター・ボストン

グリーン・ノウのお客さま

L・M・ボストン作
亀井俊介訳

第一章

1　ゴリラの一家

生まれてから死ぬまで歩きつづけても、密林ばかりがはてしなくひろがっていて、どうしても外の世界に出ることができない。そういう熱帯を想像してほしい。ぎっしりと木がしげっていて、熱い空気がもりあがってくる上を、なん時間も飛行機でとんでみても、はしからはしまで、見えるのは木のてっぺんばかり。この物語は、そういうジャングルの中からはじまる。

コンゴの奥地のこの原始の密林から、古い歴史をもち、さわやかな庭のあるイギリスのグリーン・ノウまでは、距離からいっても、感じからいっても、ずいぶん遠い。しかし、この二つは結びつくはずである。ただ、あせってはいけない。

この物語の主人公をみつけるには、きみの悪い、うすぐらいジャングルの中にはいっていか

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

なければならない。まっぴるまでも、それはカーテンがおもくたれたへやの中のようなのだから、夜ともなればお釜にはいってふたをしたような暗さだ。木の根もとから、無数のツタが縄のようにのびてよじれあい、枝にからまって葉のしげみをおし下げ、木と木をむすびつけ、ときにはなんキロメートル四方もぎっしりと一つにかためてしまう。また、ごつごつした岩ばかりの絶壁の下では、谷間に大きなシダがしめっぽくしげって、こけむしている。屋根のようにかさなりあった枝のあいだの裂けめから、日光が元気よくわりこむことができるところでは、苔がエメラルドのように輝いている。月の光は、ときには骨のように、またときには歯や白い目のように、きらめいている。おそろしいほどの静けさが、探検家たちにも中へはいってこないようにと警告している。

その中に、いったいなにがいるのか。だれもほんとうのところはわからない。神さまだというものもいる。悪魔だとか、祖先の魂だとかというものもいる。だが、たしかなことは、この土地は今までに発見された生物の中で、もっとも人間にちかいふしぎな動物——つまりあの気高くて勇敢なゴリラのすみかだということである。

いさましい土人の猟師たちは、ジャングルのはずれや小川の底に、四十センチにもたっする大きな足あとをみつけることがある。が、ゴリラにとっても、土人にとっても、そんな近くに相手がいて、ばったり出くわしそうだということは気分のよいものではない。だいたい、土人

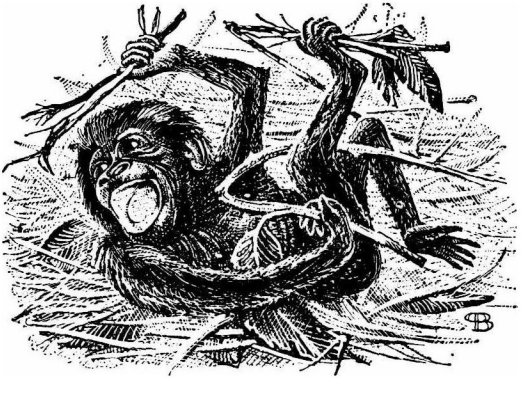
がジャングルの奥にはいってゴリラ狩りをすることはめったにない。ゴリラ狩りをするときは全種族の大事件である。そしてみんなが恐怖にちぢみあがってしまうか、恐怖のあまり前後の見さかいもなく荒っぽくなってしまうか、どちらかである。そのため、太鼓や、踊りや、お供えや、お祈りや呪文など、土人のあらゆる魔法を集めて、必死にたたかう。ゴリラ狩りは土人たちにとって、ジャングルの神がみに戦いをしかけ、その神さまの力をじぶんたちにちょうだいしてしまうことなのだ。そういう猟師たちの中には、殊勲にかがやく戦士や、追跡の名人や酋長のむすこたちがいるかもしれない。しかし、この本の主人公はこうした人たちの中にはいない。ジャングルには、土人たちの部落よりもっと奥に、大むかしから今までずっと静まりかえってきた、人間の知らない場所がいくらでもあるのだ。

ここは世界じゅうでいちばん暑いところだが、よく想像されるような、焼けついて干あがった土地ではない。それどころか、堆肥の上にたてたむしあつい温室のように、蒸気が立ちのぼり、水がしたたり落ちている。植物がしげったり、くさったりするために、あまずっぱい匂いや、鼻をさすような匂いがする。頭のすぐ上を太陽にぎらぎら照りつけられて、赤道あたりの空気は窒息しそうにあつぐるしく、ほとんど毎日、この世はこうしてできたのだと思わせるような、すさまじい雷雨をひきおこす。あの太陽の光よりもっと強烈な滝のような雨がふりつける。こうなったらもう、ジャングルの中でも雨やどりなどできはしない。ジャングルの谷間に

流れこむ大小さまざまな川は、かわききってただの泥地にすぎなくなるかと思うと、一晩でふくれあがって大水になってしまう。滝はある日ささやいているかと思うと、つぎの日にはうなりだし、絶壁からころがり落ちて雲のような水けむりをたてる。だがこのはげしい音でさえ、水ぎわまで近づいていかないと聞こえない。ジャングルにはそれほどぎっしりと樹木がからみあっている。

こんな場所に生きるものは、だれでも、わたくしたちの心をつかんでひきつける気高さをもっているにちがいない。これこそ英雄の住む場所なのだ。そしてじっさい、わたくしたちの主人公はここに住んでいる——まだほんのちっぽけな子どもだけれども。よそからはまったくきりはなされた広大なジャングルの中に、家族といっしょに住んでいる二歳のゴリラなのだ。

この家族は、父親と、三びきの妻と、七ひきの子どもと、それに生まれたての赤んぼうたちとであった。ゴリラは人間よりも早く成長するから、毛むくじゃらの二歳ゴリラも人間の子ど



もの五歳くらいに見えた。そして五歳の子どもと同じように、この子ゴリラもよく母親をてこずらせた。じっさいたいしたいたずらっ子だった。だがこの子ゴリラにとっても、父親はこわくてたまらなかった。父ゴリラは見るからにりっぱで、大きさは妻たちの二倍もあった。また信じられないほどに力が強い。しかし、きげんさえよければ、とてもやさしかった。そしてみんなを思うままに支配している。年上の子どもたちはポカポカとなぐられて、そのたびに父親のえらさを思い知らされた。しかし小さな子どもたちとはよくいっしょに遊び、ときにはひざの上にだいたり、肩にのせて運んでやったりもした。

みんなは地上でくらしていたが、じゃまなものに出くわすと、木の枝をブランコにして飛びこえていった。しかし、たいていは低い木の下のトンネルにそって進んでいくのだった。父ゴリラが先頭に立ち、道をきりひらき、ふみかためていった。父ゴリラはこの土地のこと、川とか動物の通り道などをよく知っていた。季節が変わるごとに、どこで食べものをあさったらよいか、根や、しんのあるキビや、汁の多い茎や、くだものや木の実はどこにあるのか、いろいろなことをよく知っていた。

小さな子ゴリラにとって、大地は母親のようにやさしい、頼りになるものだった。大地は生きており、とても気まえがよかった。大地のはだの毛は苔や草の葉でできており、いつもそっとなでてくれ、強い日ざしや雨からも守ってくれた。ふみしめると暖かく柔かくて、心がやす

まるような匂いや、またうきうきとはずんでくるような匂いを、一面にわきたたせていた。いつも同じように見えながら、しかも新しい驚きでいっぱいだった。

子ゴリラは、まわりにたくさんはえているキビを、むしゃむしゃとたべた。ちょうどヘンゼルとグレーテルがキャンデーとおさとうの家をたべたのと同じである。おもちゃにはシダの葉やふさがあり、それを頭にのせて遊んだ。いねむりをする時の父親のかっこうをまねたのだ。また、棒でそこらじゅうをたたいてまわったり、がんじょうなツタの茎でブランコ遊びもした。手あたりしだいに兄ゴリラにものをぶつけたり、かくれんぼうをしたりもした。かくれんぼうはとくにだいじで、父親はずうたいが大きいのに、その名人だった。音もなく姿を消してしまうのだ。これはすべてのゴリラが若いうちに身につけなければならない技術の一つで、じぶんの身を守るいちばんよい方法だった。ジャングルの中では赤んぼうといえども、生まれたときから、生きるということは危険の中におかれていることだとさとっていた。こんな楽しいところに危険があるなんて、想像もできなかっただろうけれども。しかし父ゴリラはよく知っていた。そこで子どもたちに、そのことをきびしく教えこんだ。

ゴリラは、手ばかり四本ある猿とはちがって、ほんものの足をもっている。この足には手と同じような自由に動く親ゆびがついているが、とにかくこれで歩いたり、立ちあがったり、また四つんばいでかけたりすることができる。かける時には、手のこぶしがひずめのように働く。

また、片方の手を前足のように使い、もう片方を手の仕事がなんでもできるようにぶらぶらさせながら、横に歩いていくことも多い。こうしてゴリラは、横泳ぎのようなかっこうをしながら、すきまもないほどうっそうとしげったジャングルをらくらくと通りぬけるのだ。

ジャングルにはほかの生きものも住んでいた。鳥や蝶や猿たちである。夜明けや夕ぐれどきには、木のてっぺんのあたりがひとしきりさわがしくなるが、小さなゴリラは、知らん顔だった。かれにとっては、ずっと遠くの上のほうから聞こえてくる気もちよいざわめきにすぎない。そして小川へ水を飲みにおりてくる鳥たちは、木の葉のすきまからきらきら輝いてさしこんでくる日光とまじりあって、まばゆいくらいきれいだ。小川のほとりを象の群れが通りすぎていくことがあった。だがゴリラの家族を見ても、あの楽しそうな小さな目でウィンクしたり、帆のような大きな耳をいちどバサッと動かしたり、さもなければ知らん顔して行ってしまうだけだった。ジャングルは十分広いし、新鮮な食べものはたっぷりあったのだ。象たちは広い土地をふみならしていった。そういうところで倒れた木々をとびこえて追いかけっこをすると、心がぞくぞくしてきた。というのは、高くしげったシダや木の葉がまわりをとりまいているところから外に出ると、もう身をかくすものがなにもなかったからである。象たちがいなくなったあとの空地で、子ゴリラは月というふしぎなものを空の上にも水の上にもみつけた。またジャングルは傘といってもだいぶ雨もりがするけれども、この傘がないと、雨とはなんとしめっぽ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com